

MACF 礼拝説教要旨

2021年7月4日

「忍耐と慰めの源である神」

(ローマの信徒への手紙 15章 1～7節)

15:1 わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、

自分の満足を求めるべきではありません。

15:2 おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。

15:3 キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。

「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです。

15:4 かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。

それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができます。

15:5 忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、

15:6 心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださいますように。

15:7 だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。

++++++

1) 互いの向上のため

15:1 わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。

15:2 おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。

パウロは前の章でも「14:19 だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。」と書いています。

おそらく、教会の中に起こっている極めてわがままな個人主義、自分さえよければそれで良いという発想を戒めようとしているのだと思います。

2) キリストの生き方を模範として

実はイエス様の生き方も、他者を大切にする生き方でした。

15:3 キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。

「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです。

これは、イエス様とは無関係の人たち、すなわち文字通りの罪人たちへの「そしり、悪口雑言」などが全部イエス様のところに集中してしまったということです。

人からのそしりなど受ける必要もないし、そんな言動は一切ないのに関わっている人たちへの非難中傷をイエス様はすべて引き受けることになりました。

十字架はまさに、その極限と言えるでしょう。

しかし、イエス様は沈黙し、「父よ、彼らをお赦しください」と祈りました。

「非難している側の人間に対しても、本来非難されるべき悪意のある人たちに対しても」イエス様はこの祈りを捧げました。

もし、イエス様が自分の満足だけを求める方だったら、罪ある人たちをことごとく裁き、罰することで自分は罪人と肩を並べることなどしなかったでしょう。

3) 聖書が与えようとしている内容

そしてパウロは聖書が何のために書かれているのかに言及しています。

15:4 かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。

それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。

聖書を読み、学び、感じ取り、その中の出来事や言葉から「忍耐と慰め」を学び、感じとることこそ私たちに聖書が託されている理由だとパウロは語るのです。

知識としての聖書、暗唱物としての聖書も有益でしょう。しかし、本来的には聖書のなかに表明されている神様の愛、人間の愚かさなどについての本質を感じ取りながら「神からの忍耐と慰め」を得、希望を持ち続けることこそ聖書が与えられている理由なのです。

もっといえば、私たちが絶望することがないためにこそ、聖書の言葉は届けられているのです。

忍耐と慰めがなければ、絶望しか残らないという現実が私たちの前に広がっています。そもそもパウロは神様のことを「忍耐と慰めの源である神」と紹介しています。ここにこそ、私たちの拠り所があるのです。

聖書の言葉は、まさに、忍耐も慰めも、そして心に希望をもたらすものだということです。神ご自身が、それらの源である存在だからです。

これは大きな励ましであり、希望です。

私たちはどのような気持ちで聖書の言葉と付き合っているのでしょうか。

忍耐と慰めの神に出会う気持ちで聖書を読んでいるのでしょうか？

神の忍耐や慰めを感じ取ろうとしているのでしょうか。

バイブルワークショップでは「聖書の言葉を感じとる」という作業に時間を用いています。誰か権威者に解説してもらうのではなく、自分の心に響く聖書の言葉を感じとる作業こそ、高慢にならず、身の丈にあった聖書理解の出発点なのです。

4) そして何が

他者を隣人として尊び、み言葉によって「忍耐と慰めを得て希望を受け取り」

その後、どこに向かうかと「神への感謝と礼拝」です。

「忍耐と慰めの源である神」にみ言葉をとおして取り扱われ、私たちは心をひとつにして、神への賛美や感謝をささげる方向へと導かれていくのです。

15:5 忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、

15:6 心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせていただきますように。

礼拝や感謝は「神に養われている人」であれば当然の帰結です。

礼拝しながら生きるという姿勢は、できればそうしたほうが良いというのではなくキリスト者にとっては、まさに「生きる道」そのものなのです。

キリスト者とは「キリストと一緒に自らを神に捧げつつ生きる礼拝者」だからです。

そして、礼拝における基本的な他者に対する姿勢は、いてくれてありがとう、であり、相手の存在を受け止め合う心です。あたと一緒に神様に感謝を捧げることができ、礼拝できて嬉しいです、という心が教会の集まりの土台です。

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/12YPIExsCiU>